キャラクター名
須藤　繭（すどう　けん）

プレイヤー名

シンドローム	バロール ノイマン	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	精神科の医者
オプショナル		年齢	２２	性別	男
覚醒	生誕	衝動	飢餓	初期侵食率	31 %
出自	名家の生まれ	経験	敵対組織	邂逅	主人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	1	0	0			1
精神	5	0	0			5
社会	2	0	0			2

HP	27
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	4		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	4	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	4	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
メジャー	ＲＣ	5r+4		10		
Ｄロイス入り	ＲＣ	5r+14		20		
80%入り	ＲＣ	5r+9		28		
Ｄ+80%入り	ＲＣ	5r+19		35		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
白衣	
義眼	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
超侵蝕	P	N		
両親	P　慈愛	N　憎悪		
主人（神父）	P 好奇心	N 不信感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　12	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
覇皇幻魔眼	5	5	メジャー	視界	範囲（選択）	ＲＣ	80%	
効果：攻撃力にＬＶ×5。1シーンに1回まで								
インビジブルハンド	2	4	メジャー	視界	範囲（選択）	ＲＣ	ー	
効果：攻撃力+ＬＶ。1ラウンドに1回まで								
黒の鉄槌	3	1	メジャー	視界	ー	ＲＣ	ー	
効果：攻撃力+ＬＶ×2+2.同じエンゲージにいるやつを攻撃できない								
コンセ：バロール	2							
効果：@8								
戦闘嗅覚	2	4	メジャー	ー	ー	効果参照	80%	
効果：あらゆる攻撃命中判定と組み合わせられる。+精神する								
戦術	3	6	セット	視界	シーン（選択）	ー	ー	
効果：攻撃フォロー。メジャーダイスを+ＬＶ個								
超侵蝕	1		メジャー					
効果：判定と攻撃力に+10する。1シナリオに1回まで								
ディメンションゲート	1	3	メジャー	至近	効果参照	自動	ー	
効果：遠い場所につながるどこでもドアを作れる。戦闘中や緊張状態では使えない。								
プロファイリング	1	ー	メジャー		自身		ー	
効果：観察して情報を取る								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

僕は生まれつき右目がないオーヴァードだった。それを気に病んだ母親は精神がおかしくなってとても、きれいな目をしていた。そして僕がその母親とずっと一緒にいたいと思ったころに自殺してしまった。首吊り自殺でね。その閉じられていなかった目も・・・いや、生きているよりもずっと美しかった。僕の目が、オーヴァードの力が母親を精神的に殺したんだ。父親は僕をないもののようにしていた。会うと毎回僕の右目を見ていた。父親も母親もオーヴァード出なかったし、友達にもそんな人はいなかった。周りは僕を「化け物」のように見た。だが、主にそれは右目からきているもで、オーヴァードの力のせいではなかった。それで僕は義眼を付けた。それからというもの、まるで何もなかったように僕は普通の人として扱われた。そんな中でも僕は求め続けた。母親のような生きていながら死んでしまった目を。だから、僕は精神科の医者になった。そんな中で僕はあの神父に出会った。神父は僕に「そんなに求めるなら『天使』になる気はないかね？」びっくりしたよ・・・。

僕はＦＨに入り、神父を『神』とした『天使』なった。
そこで僕は理想の目を求めて人を殺して目を取って丁寧に保管した。だけどもそれでも僕の欲は満たされてなかった。満たされなくて、もっと求めて・・・。そんな中少女が来た。彼女の目は僕の心をさらうには十分だった。それから僕は彼女とともに生き、ともにＵＧＮに入った。